

題目 プラスチック消費購買行動の類型化と規定要因 ― 二重動機モデルによる検討 ―

氏名 今井璃々花

指導教員 大沼進

プラスチック（以下、プラ）の資源循環型社会の形成が急務であり、消費購買行動の変容が求められている。本研究では、製品プラに焦点を当ててプラ消費購買行動の実行に至る過程を説明するモデルを作成し、大規模社会調査データからモデルの妥当性を検討した。人間の意識と行動は結びつきにくいことが知られており、環境配慮行動の先行研究においてこの両者の関係について理論モデルが構築されてきた。本研究は二重動機モデル（Ohtomo & Hirose, 2007）を参考にプラ消費購買行動に至る要因連関を検討した。二重動機モデルは、環境に配慮しようという意図的な動機を持って行動するという行動意図と、ある一時的な行動場面で非意図的に手を抜く行為を許容する行動受容のどちらかによって環境配慮行動に至ると説明したモデルである。このモデルに基づきプラ消費購買行動との関係が予想される心理的要因を他の先行モデルから選出し、モデルを作成した。プラ消費購買行動はバリエーションや行動場面などで多岐にわたっているため、本研究では先行研究を踏まえて複数の行動の実行難易度などを考慮しつつ20の行動に整理した。日本全国18歳以上の男女を対象としたWEB質問紙調査を実施し4000の有効回答を得た。因子分析によって3つに分類されたプラ関連行動に対して構造方程式モデリングを行った。改善の結果、適合度が高いモデルが得られた。「マイボトルを使う」といった日用品の減量行動は、行動意図と行動受容の両方が影響しており、行動意図により説明されるが、良く考えずに行われる側面も見られる行動であった。「文房具や食器などの日用品はプラ以外の素材を買う」といった特に実行頻度が低い継続使用品購買行動は、行動意図と行動受容だけでなく主観的規範も影響しており、自分が行動を取ることが期待されていると考える人ほど実行するという特徴が見られた。「レジ袋をもらわない」といった辞退分別行動は、すでに多くの人に定着しており、行動意図や行動受容よりも深刻さ・責任帰属認知が強く影響していて環境問題やその責任の所在に関心を持たない人は行わないという特徴が見られた。本研究は多様なプラ消費購買行動を整理し、二重動機モデルを通して行動別に実行に至る心理的要因を明らかにすることで、実際の行動場面における介入を検討する際の基礎資料を提供した。